

群馬詩人クラブ

会報

No. 302

編集／群馬詩人クラブ幹事会

代表／磯貝優子

発行／群馬詩人クラブ事務局

〒370-3504

北群馬郡榛東村広馬場1067-2

現代詩資料館「榛名まほろば」内

印刷 三協印刷

振替番号 00160-4-708314 中澤睦士

波の行方

堤 美代

主な記事

- 現代詩ライブ報告…………… 2
詩のこれから 井上英明
- 詩誌は、いま①…………… 3
『水の呪文』富沢 智
『濫書堂通信』佐伯 圭
- 詩集『30/60』について思うこと
提著 宏…………… 4
- 群馬年刊詩集 第40集 配付について… 4
- 次期幹事改選の投票結果…………… 5
- インフォメーション／受贈詩誌御礼… 5
- 総会と秋の詩祭開催のお知らせ… 6
- 編集後記…………… 6

風が立つたびに緑の陽射しがテーブルにこぼれた。小さい紅葉が幾重にも重なり合って風に揺れた。沼の水面から吹いてくる風が木の間をくぐってブラウスを青く染めた。風のために、小さい沼の水面に漣が寄った。波は、水辺の葦の根や水草を分け、岸辺の紅葉や朴の木や、櫟の木の根方に寄せては消えた。

今年初めて、田んぼに稲を植えるのを止めた。生涯で初めての田植えをしない六月。水無月。生まれてこの方、ずっと百姓だった。大変な決心がいるのではないかと想像していた事柄が、あつけない程簡単に止めることになった。止めざるを得ない条件がいくつか重なってしまった。長い間の減反を辛抱しながらの米作りだった。私たち百姓は、ずっと

以前から政治まつりごとからの完全な棄民なのではないかという想いを抱きながら米作りをしてきた。日毎に荒れてゆく田畑の減びを予感しながら。合理性、近代化、利便性優先の名のもとに、こんなにも、私たち百姓は気づかぬ内に、ほんとうの田畑から遠く離れてしまっていた。何百年も何十年も、泥田を耕して緑の苗を植えた六月。耨種を折るようにして蒔いた五月。土を運んで田を平らかにした。草を取り、水が漏れないように土の土手を塗るかためた。泥田に足をとられながら、一本一本、苗を植えた。汗が乾く間もなく懸命に稲を植えた。秋に稔る稲の穂波を思いやって泥の田に稲を植えた。この作業は親戚中の田植えが終るまで続くのだった。夜にはつかれ切った泥のよ

うに睡った。

美しく水の張られた田んぼに整然と苗が立ち並び、日毎に葦の緑が地面に根づいてゆく。青い空が映る。苗と苗の間をくぐって緑の風が吹き抜ける。この風に、この苗のみづみづしい水田のために昨日までの労苦が背負えたのだ。秋には、豊かな稔りを約束する信仰にも似た予兆に胸をふくらませて。

六月の水面を渡って、苗のそよぎと共に燕が運んで来る風は、累代の、父祖たちが躰に育んできた百姓を生かす風であった。その風と出会える喜びを孕んで百姓たちは質実な暮しを生きてきたのだ。苗の緑の風は無意識の目裏に灼きついている原風景だった。稲を植えず田を耕さないということは、父母たちが胸と身体に灯しつけた慈しみと育みの生の宝を捨てるという事だった。

増え続ける草茫々の荒地を前にして、言葉を失う。もうこの先には行けない。私たちは、何処に行こうとしているのか。何処から来て、何処へ。

梅雨に入った。小さな沼に魚がいるらしい。沼の中の魚が水面に近づくと波紋が広がった。小さな魚には小さな、大きな魚には大きな波紋が広がった。風が吹くたび水面に漣が立った。葦の岸辺を分けて、水草を分けて、朴の木や、紅葉の根や、櫟の木の根の奥へと、漣が立っては消えて行った。



2017年
7月22日(土)
榛名まほろば

第25回群馬詩人クラブ現代詩ライブ
「見る詩、聞く詩、奏でる詩Ⅱ」

現代詩ライブ

場所

現代詩資料館&喫茶

「榛名まほろば」

朗読会 14時〜16時

懇親会 16時30分〜

参加者

(三十四名、作品のみ一名)

- 真中てるよ・中澤 陸士
- 真下 宏子・神保 武子
- 三枝 治・鶴木 晋一
- 泉 麻里・佐伯 圭
- 内田 範子・斉藤 守弘
- 金井裕美子・井上 英明
- 白井 三夫・堀江 泰壽
- 堤 美代・松本 茂晴
- 松本都代子・提箸 宏
- 井上 敬二・富沢 智
- 富澤 礼子・関根由美子
- 関口 将夫・野口 直紀
- 内田 三郎・磯貝 優子
- 桜井 常夫・瀬下 充代
- 桑原加奈子・桑原 由佳
- 大沢 親司・桑原 和行
- 吉竹美紀子・柴田 謹子

(作品のみ/梁瀬和男)

詩のこれから

井上 英明

群馬詩人クラブ主催・現代詩ライブ「見る詩、聞く詩、奏でる詩Ⅱ」が七月二二日、現代詩資料館「榛名まほろば」で開催された。「まほろば」の喫茶室に三四人が集い、うち二二名が舞台に立ったのだが内容は今までになく多彩であったと言える。最初の朗読者は、真中てるよ氏であり、絵本の読み聞かせであった。詩にとらわれない感性であると思う。鶴木晋一氏の軽妙な詩は会場を和やかにした。中澤陸士は井上敬二のギターで現代詩を好きになったきっかけのひとつであるという歌を歌い、さらに井上敬二は自作の詩に曲をつけ、ギターの弾き語りをした。松本茂晴は祭囃子の横笛を吹き、奥様が松本の詩を朗読した。富沢智は奥様のベースの演奏に乗せてコミカルな詩を朗読した。関口将夫の朗読で終演となったが、詩を暗唱していたのは関口だけであり、それは詩に対する関口の責任の取り方だと思われた。

好きな詩人の詩、詩を書くことへ背中を押してくれた詩、自作を読む人と色々であったが、言葉にしなければ存在しない自らの詩の世界をそれぞれが披歴した。それが伝わる会場の大きさでもあった。

詩は、文字のない時代から時には楽曲や舞踏を伴い、あるいは朗々と歌い民衆の心を揺さぶってきた。今回それが継承されていることを実感した。では明日は何を成すべきか。

詩誌は、いま——⑪

「水の呪文」のこと

富沢 智

個人誌「水の呪文」の創刊は一九八〇年十二月十日。その創刊号の後記「独酒」に、私はこんなことを書いていた。「だいぶ以前から、個人誌をやりたいと思っていた。わたしたちという形で処理できるテーマは少ない。無理に詩運動でもあるまいと思うのだ。しばらくは、カラスの勝手ではないが独酒とゆきたい」と。

以後、現代詩資料館「榛名まほろば」開館の年（一九九八年九月）までに三七号を発行十八年間の平均発行ペースは、年二号ということになる。季刊は無理だが、三号は目標としていたので、自分なりに納得している。

「榛名まほろば」開館せり。／詩は生き方の時代に入った／いま、この意句の出所を確認する余裕はないが、荒川洋治の言葉だと覚えている。もちろん、まほろばの開館とは別の文脈で発せられたものだが、我田引水、我が意を得たりと膝を打ったものだ。

生き方を変えたつもりはないが、齟齬をきたすことはある。／してきたことの総和がおそいかかるとき／お前も少しぐらいは出血するか？／（堀川正美）。まほろばを動かすために、いくらかの軌道修正と妥協は必要にな

る。開館と同時に「榛名まほろば」は来てくれるお客さんのものにもなっていた。そんな新しい日々のなかで、カラスの勝手で始めた「水の呪文」をどう位置づけていいか、分からなくなっていた。それは、開館以後の十一年間で五号という発行回数に現れた。創刊以来の相棒で、表紙絵を使わせてもらっていた今井敬二クンの病死が決定的な要因となって、以後、七年間の放置、休刊状態に入っていくことになる。雑誌の運命としては、完結したという思いもあった。

しかし「川筋の淀みが自然に分かれるように、流れは小誌へと戻ってきた」（二〇一六年六月二十日「独酒」）のだ。よろしく万歳を祝うべし（萩原朔太郎）。

「濫書堂通信」縁起

佐伯 圭

時は平成19年、今を遡ること10年の昔でございました。上州、伊勢崎に住みたる佐伯某と申す者、ふと思ひ立ちまして、己が頭に浮かびましたる言の葉や、書物に関わるあれやこれ、旅先で見聞きした珍しき事物、また身辺に生じたよしなし事を、瓦版、読売のようにならぬに面白からう、と考えました。そんなふうには思ひ立ちましたのは、よき先達があったからでございます。栃木の青木幹枝氏、高崎の金井裕美子氏のお二人が出され

ていた「青金新聞」。A3版裏表を手書きの文字でびっしり埋め尽くしたその「新聞」は、たいそう読みでもありました。と同時に「こういう形なら、自分にも出せるのではないかと、佐伯某に思わせたのでございます。

と申しましたも、初めから皆々様のお目にかけてようと目論んでいた訳ではありません。その頃親しくしていた友人に、「（私設）図書館通信」と見栄をきりまして、瓦版ふうの刷り物を送りつけたのが始まりです。勝手気ままなその書き付けを、その女性は笑って納めてくれたのですが、味を占めた佐伯某、自宅のプリンターで印刷し、他の知り合い（主として上州の詩の作者）にも読んでもらおうと始めたのが「濫書堂通信」でした。

さすがに「図書館通信」では、どこかの図書館の発行物と誤解されそうでしたので、古書店「濫書堂」の店主を名乗りました。決して詐称ではありません。ここではないもう一つの世界で古書店を営む佐伯でございます。

そうやって始まった「濫書堂通信」ですが、お陰様で号数を重ね、先だつて五十号を超すことができました。回を重ねるうちに、いくつかのエッセイがシリーズになり、用紙もカラーになって今日に至っております。

好き勝手な中身とペースで、書き進めて参りました「濫書堂通信」。暫くは続くと思いますが、皆々様の励ましのお便りが何よりの後押しとなります。今後とも、ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

詩集「30/60」について思うこと

<http://h-sage.sakurane.jp/rokujyu/>

提 箸 宏

この六月三十日、第二詩集「30/60」(ろくじゅうぶんのさんじゅう)を出しました。

第一詩集「風景画」を出したのが、ちょうど三十歳の誕生日、昨年の十二月三十日、ちょうど六十歳になり、それから半年後に第二詩集を出しました。

今回の詩集はWeb(インターネット)上で閲覧する詩集になっています。簡単に言うと、ひとつのホームページが詩集になっています。ウインドウズパソコンでいうと、インターネットエクスプローラー等でホームページを見るように見ます。スマホ、タブレット端末でも全く同様です。でも、ガラケーと言われる携帯電話では残念ながら見ることはできません。そういう意味で言うと、この詩集を見られない方もいらっしゃるかもしれません。

今回詩集を出すにあたって、当然、書籍で出版することは考えませんでした。手元に、三十年前の第一詩集があり、時には手に取り開くことがあります。

今回書籍で詩集を出した時のことを想定してみました。そこそこお金をかけ、数百部作成し、百から二百部ぐらい、県内外の、今までは同人として関わった方、詩集や詩誌を送っ

ていたいただいた方、交流のある方、そして読んでいただきたい方等に贈呈し、あとは、今後新たに交流ができた人に贈呈するために取っておく。

でも、「読んでもらえるのかなあ」という不安は消えません。「詩集発行しましたよ」という記念ぐらいにしかならないんじゃないか。おそらく、かなりのお金を出して。

もちろん、読むに耐える作品かどうかがまず第一であることは分かっています。書いていない時期の長かったこと、寡作なこと等もそれで、Webで出すことにしました。詩人に出版・印刷に関わる人が多くいらっしやいますが、自分はコンピュータの仕事長くやり、ホームページを作る仕事もしています。ですから、紙からWebへという時代の流れの一つでもあるだけなのです。

でも、決して新しいわけではありません。縦書きにこだわっています。多くのホームページでは横書きで、詩作品等も発表されています。縦書きのものでも写真と同じようにイメージになっています。これは違います。スマホを、縦で見た時、横で見た時、見た目が異なるように行数の調整ができています。

これを書いている今日、七月三十日、発行から、ちょうど一ヶ月になります。どのページがどのくらい閲覧されているか日ごとに関心があります。詩集が、どのように読まれるかを考えさせられます。そして、次の手の打ち方をも考えています。

群馬年刊詩集 第四〇集 配布について

発行は十一月二十五日です。

年刊詩集にご参加くださいました方には、総会の受付にて配布(二部)いたします。

参加費は左記にお振込みくださいますようお願い申し上げます。

なお、当日欠席で郵送を希望する方は、参加費に送料500円を加算してください。

参加費振込先(郵便振替)

口座番号 00100051655622

口座名義 斉藤 守弘

*振り込み手数料は自己負担となります。

*年刊詩集分〇〇円・郵送料500円と明記のこと。

問い合わせ先

〒370-3504

北群馬郡榛東村広馬場1067-2

現代詩資料館「榛名まほろば」内

群馬詩人クラブ事務局 富沢智

FAX 0279-55-0665

メール harunamahoroba@nifty.com

次期幹事改選の投票結果

次期幹事の選定について、無記名・五名連記・七月十日締め切りで投票をお願いいたしました。集計結果をご報告いたします。

○投票者数五十五人（投票率52%）

得票数（高得票数順・同数の場合五十音順・敬称略）

- 十六票 伊藤信一
 - 十一票 新井啓子、福田誠
 - 十票 泉麻里
 - 九票 小野啓子、狩野務
 - 八票 白井三夫、上林忠夫、提箸宏、須田芳枝、堀江泰壽、
 - 七票 井上英明、川島完、時沢博、房内はるみ、
 - 六票 三枝治、志村喜代子、清水由実、関口将夫
 - 五票 石田洋、神保武子
 - 四票 愛敬浩一
 - 三票 大橋政人、大塚史朗、堤美代、寺内拓、山田弘子
- （二票以下は略させていただきました）

以前からの申し合わせにより、現幹事十名全員が退任し、これらの方の中から新たな十名の幹事をお願いすることになります。それぞれ、ご事情やご都合もあろうかとお察しいたしますが、当該の方々のご協力を切にお願いいたしますとともに、投票にご参加いただいた会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

インフォメーション

群馬県立土屋文明記念文学館 第97回企画展

「愛の手紙―文学者の様々な愛のかたち―」

会 期 平成29年7月15日(土)～9月18日(月・祝)
本展では、日本近代文学館の御協力により、文学者たちの自筆書簡を展示し、作品から想起される姿とはまた違った一面を浮き彫りにします。

観覧料 一般410円

◎記念講演会（定員150名 要申込）

9月17日(日) 14時～15時30分

「愛の手紙について」

講師：中村稔氏（詩人・日本近代文学館名誉館長）

問い合わせ先／土屋文明記念文学館

電話 027137317721

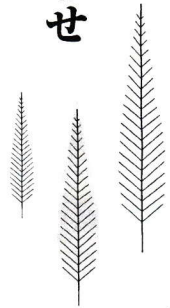
受贈詩誌御礼

*ご惠贈感謝します。

- 山形県詩人会会報 32
- 大分県詩人協会会報 49
- 千葉県詩人クラブ会報 238
- 日本詩人クラブ広報「詩界通信」 79
- 石川詩人会会報「石川詩人」 44
- 宮城県詩人会会報 25
- 福島県現代詩人会会報 115
- ミニコミ誌「裸心版」2017年6月30日号
- 山梨詩人会事務局
- 「SUKANPO」23 田口三船
- 栃木県現代詩年鑑・平成29年度版
- 栃木県現代詩人会 栃木県現代詩人会
- 第三次「椎の木」復刻版（解題・総目次・執筆者索引） 三人社

（八月十一日現在 敬称略）

平成二十九年総会と秋の詩祭 開催のお知らせ



平成二十九年総会および秋の詩祭を左記のとおり開催いたします。皆様方、万障お繰り合わせの上、ご参加をお願い致します。

期日 平成二十九年十一月二十五日(土)
場所 前橋テルサ9F 赤城の間

受付開始 午後1時30分
総会 午後2時〜2時30分
秋の詩祭 午後2時40分〜4時
受賞記念パーティー 午後4時10分

【総会】

- 議長選出
- 代表幹事挨拶
- 1号議案 平成二十九年事業報告
- 2号議案 平成二十九年会計報告
- 同監査報告
- 質疑応答
- 3号議案 幹事改選
- 4号議案 平成三十年事業計画案
- 5号議案 平成三十年予算案
- 質疑応答

【秋の詩祭】

第十二回三好達治賞受賞記念講演

講師 大橋 政人氏(三好達治賞受賞者)
演題 「まじごさんからの手紙」

◆講師紹介

大橋政人(おおはしまさひと)氏

1943年、群馬県新田郡笠懸村(現、みどり市笠懸町)に生まれる。東京教育大学在学中から本格的に詩作を始め、詩集は『ノノヒロ』、『秋の授業』、『歯をみがく人たち』、『26個の風船』、『まじごさんへの質問』など13冊。少年少女詩集の分野では個人詩集『十秒間の友だち』のほか共著多数。絵本(文担当)は福音館書店から『いつのまにかの まほう』『つかめる かな』など8冊。現在、星野富弘美術館詩画公募展審査委員のほか群馬県文学賞、群馬県高校生文学賞選考委員、前橋市の「若い芽のポエム」推薦委員、平成22年から、上毛新聞「ジュニア詩壇」選者、群馬県文学賞、上毛文学賞、三好達治賞など受賞。日本現代詩人会会員、群馬詩人クラブ会員

【三好達治賞受賞記念パーティー】

午後4時10分
会場 前橋テルサ1F「オルヴィエーターナ」
会費 四五〇〇円

◆訂正とお詫び

会報301号に掲載された『年刊詩集第四十集』の参加費の振込先「口座番号」に間違いがありました。ここに訂正し、お詫びいたします。

(誤) 口座番号 00110151655622

(正) 口座番号 00100151655622

編集後記

今年、幹事改選の年。投票にご参加いただき、ありがとうございます。投票結果に基づき、幹事になっていただけるかどうかが、お訊きしていくと、その方その方固有の事情や状況で、いろいろあるのがわかってくる人が生きること、生活することの、いろいろ、に触れて、物思うことが多いそんな時期でもある。

日照時間は平年の4〜6割、記録的な長雨が続いた八月。最も雨量が多かった榛名山では、1日〜15日に432ミリの観測。梅雨期の6月7日〜7月19日の337ミリよりも多かったという異常ぶり。加えて低温。農作物の生育も懸念されている。社会不安も多々ある。この号が皆様のお手元に届く頃は、秋。どうか無事に日々を過ごしていただけることに感謝し、穏やかな空と豊かな実りを祈りつつ、本号の編集を終了した。(金井裕美子)